社会　子どもの発達段階に即した社会認識の育成を目指す社会科学習
― 社会生活を豊かにする思考力・判断力・表現力を育てる学び合いの在り方 ―

1　社会科で願う豊かな学びの姿

自分のくらしや直接体験の中から疑問を見付け，調べ学習や学び合いを通して問題解決を図ることで，分からなかったことが分かるようになること。さらに，分かったことを今の自分のくらしにつなげて考えることによって，社会の見方・考え方が変わるとともに，よりよい社会の創造に向けて，どのような行動をとっていけばよいかという社会参画の芽生えが見られること。このような姿を育成していくことが，小中学校の社会科学習において大切だと考えている。

私たちは，以上のような考えをもとに，社会科で願う豊かな学びの姿を次のようにまとめている。

○ 積極的に追求を行うことを通して，知識を関連付けたり構造立てたりしながら社会的事象の意味や意義について，多面的・多角的に判断していく姿。
○ 自分のくらしや生き方について社会的事象を通して考え，社会の主体者として社会に参画しようとする姿。

2　社会科における思考力・判断力・表現力とは

私たちは，社会科における思考力・判断力・表現力は相互に深く関連しており，切り離せないものであるととらえつつ，以下のように考えている。

思　考　力	社会的事象を多面的・多角的に考察する力。社会的事象の意味・意義を解釈する力。事象の特色や事象間の関連をつかむ力。加えて，これらの力で得た知識・概念などをまとめる力。
判　断　力	公正に判断する力。多様な社会的な見方や考え方ができる力。公正に判断する力は，事象を科学的に判断することだけでなく，未来に向けて子ども自身が生き方を判断する力を指す。つまり事実判断の上に立った価値判断ができるということである。
表　現　力	思考・判断したことを他者に伝える力。ここでの表現力とは，「自分の考えを論述する力」と考えている。社会的事象の中の問題に対して，根拠をもって自分なりの意見や考えを表現できる力の育成を目指している。

また，思考力・判断力・表現力を11年間のつながりからまとめ，以下のように整理してきた。

初等部前期	没頭して遊んだり体験したりしたことから気付きや課題をもち，自分なりに考えたり工夫したりして，そこで得た思いや疑問点を素直に表現する力。
初等部後期	身近な社会でおこる社会的な問題を発見し，問題を解決するために，ある観点をもって，見学・調査して，自分の考えをもち，友だちの意見などを比較し練り合って自分の意見を決め，それを相手に分かるように伝える力。
中　等　部	社会が内包する問題を発見し，社会的事象の特色や相互の関連をつかんだり，意味や意義を解釈することにより，他者の調べたことに対して意見を述べたり，考えを伝えることができたり，社会をよりよくつくりかえていく情報を発信する力。

このように考えている思考力・判断力・表現力を育成するためには，①習得した知識・技能を「活用」する学習活動を系統的・継続的に行うこと，②他者とのかかわり合いを大切にした学習活動を取り入れることが有効であることの２点が分かってきている。

このような活動を通じた子どもたちの思考力・判断力・表現力の高まりに対する評価は，単元の終末だけではなく，子どもたちが思考し発言している単元の途中でも積極的に行っている。具体的には，各時間の子どもの発言やふりかえり，終末でのイメージマップを集積し，それを活用した評価を行う。

単元を通しての思考力・判断力・表現力の評価規準については，22年度に整理した「思考力・判断力・表現力の11年間のつながり」と，「社会科で願う豊かな学びの姿」を基盤に据えて，各学年と各単元に応じて設定する。

この評価規準を用い，単元の中で繰り返し評価することで，社会認識の変容，言い換えれば思考力・判断力・表現力の高まりをとらえることにしている。

3　思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 学びをいかす

次の文は，小学６年のわが国に関わる第二次世界大戦についての学習でのふりかえりである。

> 今日，101才で戦争経験者の飯塚さんに来ていただきました。飯塚さんの話を聞いてぼくが思ったことは，戦争のようなむごたらしいものを二度とくり返してはならないということです。話を聞いて，爆弾が落ちてきたりとか，飛行機に銃弾が当たって燃えながらついらくしたりなど，痛々しいことばかりです。もし，今の時代にまだ戦争が続いていたら，満足に食べ物が食べられない，いつ爆弾が落ちてくるかわからないから，いつでもビクビクした状態でくらしていかなければいけないということだからやっぱり戦争のようなむごたらしいことはしてはならないと思います。そして，今の時代，また戦争をしよう！なんてことは絶対にしてはならないから，その進歩を少しずつ自分たちの力でし，戦争の力で変わるということを変えていきたいです。

このふりかえりから，戦争の悲惨さを他人事ではなく自分のくらしに引き付けて考えている様子が分かる。また，「自分たちの力でし，戦争の力で変わるということを変えていきたいです。」と自分たちで社会の在り方を変えていく必要性を考えるようになった。このように，学習している内容を自分のくらしや他の学習内容につなげようとする姿を「学びをいかす」姿として大切にしたい。

このような姿が表れるためには，子どもたちが追求する課題は自らのくらしや社会生活に近づけたものでなくてはならない。また，追求する過程で，自らのくらしに引き付けて調べたり考えたりすることができる内容でなくてはならない。さらに，驚きや発見，疑問といった心の動きが生まれるような対象との出会いや，その心の動きをエネルギーとして追求できるような学習過程を設定することが大切であろう。

以上のような学習を構想することによって，子どもは学習の中で思考し判断したことを自らのくらしや社会生活にいかそうとするのではないかと考える。

(2) 学び合い

思考力・判断力・表現力をより育成するために学び合いを深めることを考え，そのための手立てとして新しい見方・考え方と自分の考えとの関わりについてより深く考え，練られたものを表現できる「第２の学び合い」を成立させる単元構成を大切にしている。このことにより，自分の意見が確かだと思った理由を述べたり，友だちの考えを聞き考えを深めたりする姿を見ることができると考える。

この「第２の学び合い」を行うことによって，思考力・判断力・表現力が高まることがこれまでの取組から明らかになっている。その一方で，その力がどれだけ社会生活を豊かにすることにつながるかという点では明らかにできていない部分がある。「学びをいかす」ことを考えていくうえで，その学習の中だけで終わる学びではなく，子どもたちの今，そしてこれからの社会生活につながる思考力・判断力・表現力を育てていく学び合いの在り方が求められていると考える。そのため，「学校で学んだことを自らのくらしや社会生活にいかし，より豊かにしようとする姿につながりうるか」ということもとらえられる評価規準を各単元で設定する。併せて，「第２の学び合い」を行う学習場面を，それまでの学習で習得してきたことをもとに自らの考えをまとめることや主張をつくりあげること，意志を決定することにいかす場面として位置付け，「第２の学び合い」を組み込んだ単元構成で社会参画の芽生えが可能か検証したいと考える。

(3) 教師のはたらきかけ

学び合いを成立させるために，主に「掘り下げる」と「提案する」の二つのはたらきかけを大切にしている。

具体的には，評価規準にそって，鋭い視点で物事をとらえている子どもや別の角度から考えている子どもをとらえ，その思いや願いの根拠を問い返し，明らかにする。こうすることで，学び合いの場面での論点がより整理され，考えを深めることができる。また，子どもが一つの考え方に固執しているとき，別の面で見なければならない事象や調べ方を教師から提案する。ただし，別の面で見たり考えたりしている子どもがいた場合には，その子どもが言いたくなるような場面を授業の中でつくっていく。このことが学級全体の思考の深まりとともに，自らが主体となって学びに加わる姿勢を培い，ひいては社会参画の力へとつながると考えている。

（文責　和田　倫寛）